アーカイブ通信 No.30

No.30
2024.3.1

◆編集・発行：
ネットワーク・市民アーカイブ
事務局
〒189-0012 東京都東村山市萩山町 2-6-10-1F
tel･fax：042-396-2430
E-mail：info@archive-tama.sakura.ne.jp
◆正会員 1 口 6,000 円、賛助会員 1 口 3,000 円 / 年
ゆうちょ銀行　振替口座 00120-9-729226
口座名：市民アーカイブ　　※団体会員 2 口～

資料にいかに向き合うか
―聞き取りからフィールドワークへ

大門正克
（日本近現代史／横浜国立大学名誉教授）

40年に渡る調査と研究の中で、地域に出かけて文字史料を調べ、聞き取りを続けてきた。ここで文字史料と聞き取りを合わせて「資料」と呼べば、40年の間に、資料への向き合い方を考える大事な契機が2つあった。聞き取りの変遷と、フィールドワークとしての調査である。

資料に向き合う契機

◆聞き取りの変化

私の聞き取りは、①テーマを聞くことから始まり、②次いで人生を聞くことに広がっていった。私の聞き取りで、もっとも大きかったのは、その次に③「聞く」ことの意味に気づく機会があったことである。

聞き取りを始めて20年近く経った1997年、山梨県のある農村女性の聞き取りで、その女性が途中から語ってくれなくなるということが起きた。初めてのことで、その後、私は聞き取りをすることができなくなったが、2003年にある研究会で聞き取りについて話す機会を与えられ、そこでようやく97年の聞き取りに向き合うことになった[※1]。

その後、私は、04年から、岩手県北上市和賀町で、手探りで聞き取りを再開した。どのように聞けばいいのか、暗中模索の私は、語り手が語ってくれれば、ともかくもその語りを聞くことにした。そのような中で私は、初めて聞き取りの中で私から尋ねるのではなく、語り手の語りに耳をすますことになった。そこで私は「聞く」には、ask（聞き手が尋ねる）とlisten（語りに耳をすます）という2つの聞き方があることに気づいた。先の①も②も、私の側に問いがある聞き方であり、いわばask型の聞き取りだった。聞き取りをずっと続けてきたにもかかわらず、「聞く」ことの意味を考えたのはこの時が初めてであり、その後の私は、listenすることを心がけて聞くようになった。

17年、私は、『語る歴史、聞く歴史――オーラル・ヒストリーの現場から』（岩波新書）を著し、明治から現在に至る聞き取りの取り組みと、右に記した私の聞き取りを振り返った。その本で私は、listenする中で聞こえてきたことを次のように表現した。「語る歴史の中では、時間にそって経験があるのではなく、経験の中で時間がつながりあっていた」。聞き取りで語り手が語るのは自らの経験についてであり、そこでは時系列に沿って語られることはむしろ少ない。語り手は自分にとって大事な経験について、時間をこえて語ることが多いのに気づいた。そしてこのことは、後述のように、私の資料への向き合い方にも大きな影響をおよぼすことになった。

◆フィールドワークとしての調査

東日本大震災後、私は岩手県陸前高田市に通い、今に至る。津波で市街地を壊滅的にやられた同市の復興過程では、巨大な嵩上げによる新しい街の造成など、先行きのよく見えない変貌を目の当たりにした。とぎれとぎれにつぶやかれた逡巡や焦燥感を聞き、あるいは息せきをきるように語られた震災当日の様子を聞くこともあった。そのような中で私は、何よりも現地を訪ねて現場に立ち、その風景や状況の中で話を聞き、資料や歴史について考えることが大事だと痛感するようになった。聞き取りや文字史料は、場所や風景と結びついている。このことも、私の資料に対する向き合い方に大きな影響を与えた。

史料読解と聞き取りの要点

以上の2つの契機をふまえて、私の資料への向き合い方

開館 10 周年記念集会

地域雑誌『谷根千』とその後
～厄介な「時代」をどう記録するか～

2024年6月16日（日）午後2時～

講師：森まゆみさん（作家、編集者）

1984年に創刊された『谷根千』は、雑誌発行だけでなく、地域の歴史的環境の保護などの市民活動へと展開、「谷根千〈記憶の蔵〉」という自主的スペースを作る活動も継続されています。ミニコミと地域社会は、デジタル化の時代とどう向き合い、紙の強みをどう生かしていけるのか。地域雑誌を起点とする活動の展開と可能性、地域資料探索の方法や生かし方についても伺います。

・会場：たましん RISURU ホール 5F 第 1 会議室

・資料代：800 円（会員無料）要申込・先着順

を整理すると、同時代史的検証への留意、資料読解の過程が大事、思い描いて読む／聞く、の3つになる。

◆同時代史的検証への留意

同時代史的検証は、聞き取りの変化以前から、文字史料の読み方として留意してきたことである。90年代に入り、東西冷戦構造の崩壊やグローバル化、国民国家論の隆盛など、歴史(歴史学)と現在が大きく変貌するもとで、私は97年から、現在と歴史を往還する思考をエッセイのかたちで書くようになった。

そうした中で私は、歴史について考えるということは、どの時代でも、今を生きる人間が過去を問うという共通の特徴をもっており、資料を読み、歴史に向き合う際には、今を生きることと、過去を問うことの両方を自覚する必要があると考えるようになった。今を生きる私の問題関心に留意しつつ、その時代にピン止めして、同時代の状況の中で資料を理解することは、今に至る私の方法である。

◆資料読解の過程が大事

資料に対する2つ目の向き合い方は、資料読解の過程が大事だということである。先の岩波新書『語る歴史、聞く歴史』の執筆当初は、聞き取りと文字史料の相違を意識していた。対面的で身体的な聞き取りは経験を語るものであり、時系列に沿って整理することの多い文字史料とは、特徴が大きく異なると考えていたからである。

だが、やがて両者の相違よりも共通点を強く意識するようになった。資料を軸に研究を進める歴史学にとって重要なことは、資料を読み解く過程を含めて叙述することであり、そこにまた歴史と歴史学の醍醐味がある。その点で聞き取りと文字史料は、ともに解き明かす過程が大事であり、相違点よりも共通性を認識すべきだと思うようになった。listen の聞き方を通じて、語り手が語る経験の過程に耳を傾けるようになったことも、聞き取りと文字史料ともに過程の読解が大事だと思うようになった大きな要因だった。

資料読解の過程の叙述にとって大事なことは、文脈を理解することだと換言することができる。この点で、ロシア文学者の奈倉有里(なくらゆり)は、人と人を「つなぐ」言葉を選ぶためには、「それぞれの言葉がいかなる文脈のなかで用いられてきたのかを学ぶこと」が不可欠だと述べる。[※2] オーストラリアの先住民であるアボリジニの歴史実践を研究した保苅実(ほかりみのる)は、「かれらには、かれらの歴史の文脈がある」という。[※3]「かれら」とはアボリジニのことである。

2人の指摘をふまえれば、資料と歴史をめぐっては文脈を理解することが肝要であり、それらを含めて歴史を叙述する必要があるといっていいだろう。

◆思い描いて聞く／読む

聞き取りで listen することを心がけるようになった私は、語り手の思いの核心にどれだけ耳をすますことができるかが大事だと思うようになった。東日本大震災後、フィールドワークで現地を訪ね、現場に立つことが大切だと感じた私は、文字史料についても思い描いてどれだけ読むことができるのかが大事だと思うようになった。現場の風景や状況を思い描いて聞く／読む。これが資料に向き合う私の3つ目の要点である。

陸前高田でのフィールドワークを紹介しておきたい。震災後、保育所長だった佐々木利恵子さんに話を聞いてきた。その過程で、高台にあった佐々木さんの自宅に、奇跡的に保育関係の資料が残されていることがわかった。保育資料をほぼ読解できたと思った21年、佐々木さんに保育のお散歩コースをガイドしてもらう機会をもった。佐々木さんは、15人ほどの参加者の目を樹々や田んぼの用水路などに巧みに促し、参加者はいつの間にか保育のお散歩を思い浮かべて歩くことになった。私は保育の資料を思い出し、資料と佐々木さんの声を往還しながら歩いた。

岩手県陸前高田市でのフィールドワーク
(撮影、宮代栄一氏)

フィールドワークのあと、再び保育資料を読んだ時、フィールドワークで歩いた様子が蘇り、それまで目に入っていなかった保育資料の中の言葉が目に飛び込んできた。子どもたちは、お散歩がいかに楽しいかを話し、保育士の人たちは、子どもたちの声や気持ちを資料に書きとめていたのである。フィールドワークをして、思い描いて聞く／読む中で、私は資料をもう一段階深く読むことができるようになったのだと思い、それらの試行錯誤の過程を含めて、保育資料への向き合い方を叙述した。[※4]

資料に向き合うということは、いつでも同じように資料を読むことではなく、今を生きる中で、あるいは資料への向き合い方に変化が促される中で、少しずつ更新されるものだと思っている。保苅実は、先の本の中である編集者とのやりとりを紹介し、「丁寧に勉強し、静かに深く感じ、そして身体で経験し続けたいと思います。それ以外に、人生を豊かに生きる方法なんてないのではないでしょうか」と述べている。私もまた、頭だけで資料に接するのではなく、思い描きながら、どうにかして身体を含めて資料に向き合いたいと思っている。

現場の風景や状況を思い描いて聞く／読む、そして同時代史的検証に留意し、資料読解の過程を含めて叙述すること、それが現在の私の資料への向き合い方である。

(おおかど・まさかつ＝会員)

高田保育所修了文集『みんな　なかま』

※1　大門正克「聞こえてきた声、そして「聞きえなかった声」」『歴史評論』第648号、04年
※2　奈倉有里『夕暮れに夜明けの歌を』イースト・プレス、21年
※3　保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』岩波現代文庫、18年
※4　大門正克「「高田の保育」が映し出す「子どもの世界」」大門ほか編『「生存」の歴史をつなぐ』績文堂出版、23年

ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信（ミニコミ）を、発行者の方に紹介していただきます。

La Mano 通信

クラフト工房 La Mano は東京都町田市の緑に囲まれた染織工房で、4年間の準備を経て1992年に設立された福祉作業所です。地域と自然のあたたかさに包まれ、恵まれた豊かな環境の中で、天然素材を使った染めと織り・アトリエ活動を中心に、時には散歩をしたり、染料採取したり、うたったり……。

そんな La Mano の季節の移ろいとともに、作業の様子や展示会告知など、ボランティアさんや近隣住民の方に発信してきた『ラ・まの通信』。当初はハガキで毎月発行していましたが、2002年3月に『ラ・まの新聞』としてB4用紙両面に、内容に応じては2枚になることもありました。時にスタッフが手書きした号、100号記念でカラー印刷した号もあります。現在は再び『La Mano 通信』と名前を戻して年4回A3用紙両面に。そのうち2回は夏と冬の工房展の告知としてカラー版を増頁しています。

自閉症やダウン症などの障害を抱えたメンバー（施設利用者）のイラストは、思いも寄らない捉え方をしています。自由で力強く、あざとさのない魅力的なイラストを描いてくれるので、紙面にはふんだんに盛り込みます。行事報告などは全員の名前を出し、親御さんやメンバーを知る方に様子を伝えられるようにしています。メンバーだけでなく、スタッフ（施設職員）の存在とセンスも La Mano には欠かせないものなので、冒頭の季節をお伝えするコーナーはスタッフに自由に書いてもらっています。以前はスタッフコラムというコーナーもありましたが、発行回数が減ってからは紙面に余裕がなく、ストップしています。いつかまた再開したいと考えています。また、全ての記事に誰が原稿を書いたのか分かるよう、文末にスタッフ名を載せています。

封入作業はメンバーの仕事です。宛名シールを貼ったり、印刷された通信を折ったり、封筒に入れたり。そして暑い時も寒い時も歩いて周辺の住宅へポスティングをしたり、町内会の回覧板で全戸配布をお願いしたりして、La Mano の存在や活動を知ってもらいます。「通信を見て工房展に来た」というお客様がもっと増えたら良いなと思っています。

（荒木花子）

- 1988年6月創刊、年4回発行、通常時1,000部・工房展前5,000部、A3判
- 近隣住民の方に配布
- tel：042-736-1455（荒木）
- 当館所蔵：50号（2007年）～継続

▽138（2023年11月）号内容＝冬の染織展案内、これからの La mano がめざすもの、寄付お礼、スタッフ紹介他

市民活動のひろば

「東京・多摩地域を中心とした市民活動交流誌」として2002年に創刊して22年。年10回発行で現在218号（特集：能登半島地震）を編集中です。

日々の暮らしの中で、さまざまに直面する疑問や課題。「おかしいな」「ひどいんじゃない」「仲間がいないかな」「変えたい」「知ってほしい」「一緒に考えたい」……などの思いから、動いている人・団体に活動紹介を書いていただいています。

毎号異なる分野の特集を組み、そのテーマに沿った活動をされている方、3～6人（団体）にご執筆をお願いしています。

最近の特集タイトルは、「暮らしの中で木々と共に」「安心して働き続けたい」「ミニコミ資料群が語る」「住んでいる町をよくしたい」「虐殺の日（関東大震災）から100年」「ちゃんと知りたい新型コロナワクチン」「語り・昔話がつなぐ地域」「新型コロナウイルスから見えてきたこと」。人権・自然保護・教育・医療など、さまざまな分野を扱っています。これまで1000団体（個人）以上に活動紹介をしていただきました。どんな課題でも必ず取り組んでいる市民の方がいることに驚き、励まされています。

特集の他に映画、小さな虫の世界、伝えられない国際情勢、英語の絵本、しょうがい者の当事者運動、在日朝鮮人の歴史、不登校などの連載記事も好評です。

また、毎号はさみ込んでいる情報編には、この先1か月に行われる集会・展示・傍聴など100件以上の催し案内も掲載。小さく折りたたんでご自身のスケジュール表に挟んでくださっている方もいます。

毎月の発送日は、前月に紙面上で公表しており、読者の方が発送作業のお手伝いに来てくださいます。手作業をしながら感想を話したり、それぞれが課題と思っていること、団体の情報交換・交流の場にもなっています。

02年の創刊以前は東京都の市民活動支援事業として発行しており、都発行時代を含めると半世紀の団体・個人の活動を追うことができます。その時々、どのような問題に直面していたのかが見えるとともに、小さな声から始まった異論が、時とともによりよくなっていることもあり、時代の分岐点が見えてくることもあり、活動を記録する媒体でもあります。

活動分野や地域は違っても、出会ってしまった目の前の問題を自分ごととして捉え、どう解決に近づけていくのかという知恵や行動には共通項があります。より多くの方に読んでいただきたく、購読申込みや、バックナンバーの送付はいつでも受付中です。

（江頭晃子＝会員）

- 2002年創刊、年10回発行、500～1000部、B5判、28～36頁。
- 購読料：2500円/10回
- tel/fax:042-396-2430
  E-mail：hiroba2002@a-simin.sakura.ne.jp
- 当館所蔵：1号（2002年）～継続

▽217（2024年1月）号＝くにたちみらいの杜プロジェクト、芹が谷公園をよりよくする市民の会、シルフレイ、連載他

第９期 緑陰（りょくいん）トーク報告

第3回　6月24日(土)

目録法の展開

―「目録」は世界への窓だった

中井万知子さん(元国立国会図書館職員)

私は国立国会図書館（ＮＤＬ）に１９７５年に入館し、業務機械化、90年代以降の「電子図書館」といった変化を経験しました。本日は、長く係わってきた目録の変化に焦点をあてることにします。

◇目録と目録法の歩み

一般に「目録」は品目を記録したリスト＝「カタログ(Catalog)」で、図書館の目録は、利用者が必要な資料を発見し、識別、選択、入手できるよう、その特徴を記録したものと言えます。

目録の歴史は、紀元前の古代アレクサンドリア図書館に遡りますが、15世紀以降の印刷術の発達と出版の隆盛を経て、19世紀中期の公共図書館の誕生により、近代的な目録法が考案され、「目録規則」も制定されるようになりました。

当初は本の形態で編さんされる冊子体目録が一般的でしたが、蔵書が増えると抜き差しが自由にできるカード目録が主流になります。国立図書館が自館の目録カードを印刷して、他の図書館に頒布する「印刷カード」事業も始まり、目録の共有化、そのための目録の標準化の活動が活発になりました。

第二次世界大戦後に創設されたユネスコは、国際的な出版物の交換の推進を任務の１つに掲げ、各国の出版物の目録、すなわち「全国書誌」の作成や国際的な目録原則の制定等の標準化活動をバックアップしました。これは「国際書誌コントロール（書誌調整）」と呼ばれています。

ＮＤＬは１９４８年に設立され、当初からユネスコの開催する国際会議に参加するなどして、目録業務の整備に取り組みました。当時のＮＤＬにとって、目録は世界に通じる窓だったと言えます。

◇目録法の構造的変化

次の大きな変化は、目録のコンピュータ化です。日本でも70年代にはＭＡＲＣ（機械可読目録）が開発され、磁気テープで頒布されると、目録の共有化は大きく進展し、さらにＯＰＡＣ（オンライン閲覧目録）がインターネットでも公開される時代となりました。一方、情報環境の変化によって、これまでカード目録を前提としてきた目録法の抜本的な見直しが図られることになりました。

97年に発表された『書誌レコードの機能要件（ＦＲＢＲ）』は、データベース作成手法を用い、目録情報の中核となる存在を「実体」、「実体」に備わる特性を「属性」、さらに「実体」どうしの「関連」を定義し、モデル化したものです。最初は目録現場の戸惑いも大きかったのですが、世界の目録規則がＦＲＢＲに沿って改訂され、「日本目録規則」も最新版の２０１８年版でその構造を取り入れました。ＮＤＬ等による適用も始まっています。

◇「市民アーカイブ多摩」の目録

ＤＢソフトのアクセスで管理されているため、条件に応じたリストの排列や抽出ができ、『ようこそ！市民アーカイブ多摩へ』（20年刊）に所蔵ミニコミ目録が収録され、ホームページでも、分類別・地域別のリストが公開されています。逐次刊行物の目録として見た場合には、「順序表示」と呼ばれる巻号や年月次、ＦＲＢＲで重要視されている「関連」に関する情報も、刊行時期や改題関係等を識別するために有用と考えられます。

今後デジタル化が進展しても、「メタデータ」と総称される目録情報の重要性は変わりません。一方で、デジタル化の狭間にある資料自体を、どのように保存し、継承していくかの課題は、ますます大きくなるように思われます。（記・中井＝会員）

付記・中井万知子著『夢見る「電子図書館」』（郵研社）が23年9月に刊行されました。電子図書館事業の推移を中心に、ＮＤＬの歴史を俯瞰する内容になっています。（ISBN978-4-907126-59-9/2,750円）

第4回　9月23日(土)

市民が学び、考える歴史講座

―自由民権カレッジの実践

松崎 稔さん(町田市立自由民権資料館)

２００９年から21年まで、町田市立自由民権資料館では「町田自由民権カレッジ(以下、カレッジ)」という講座を運営した。座学中心の１年目、史料講読中心の２年目、卒業論文にむけ研究報告中心の３年目と、３年かける講座で、他にはあまり例がないのではないか。

◇調べ・考え・描き、卒論を書く

めざしたのは「知る」楽しさ以上に、「調べる」「考える」「描く」楽しさを伝えることだった。社会的風潮は「知る」ことの面白さを重視する方向に向かっていると感じていて、それに抗いたいという気持ちが当時の学芸員には共有されていたと思う。団塊の世代が定年を迎えるタイミングで、その世代の知的好奇心をくすぐるという狙いもあった。

２年目の終わりには卒論テーマを決め、３年目は個々人が調査に入るのだが、テーマは日本近世から現代であればよいということにした。当初はもう少し民権運動やその周辺に限ることも考えたが、個々人の関心事と向き合うことで、受講生の主体的な学びに近づけるのかもしれないと判断した。卒論のテーマは大きく２つのタイプに分けられるのではないかと思っている。１つは受講して興味を持ったことを調べる、もう１つは自分の来歴・出自・社会経験を意識し、それに何らかの答えを出そうとするものである。どちらにしても個々人が興味・関心を持つというテーマは、少なからずその人の経験と関係している。その意味で卒論を書く行為

は、個人が社会経験を踏まえて選んだテーマについて調べ・考え・描く行為となったと思う。

◇同窓会で続く学び

卒業生は同窓会を組織し、活動を続けている。月例会のほか、古文書解読をしている「蚯蚓（みみず）の会」、国会図書館憲政資料室にある民権家天野政立の史料を読み彼の思想を考える「天野政立研究会」、研究者の論文を読み議論する「〈んの会〉」、読書会「一金会」と4分科会が組織され、会報『凌霜の風』も発行し、学びと交流を継続している。

◇社会教育と生涯学習の両視点

カレッジのねらいの背景には、「社会教育」から「生涯学習」への行政側の姿勢の転換とどう向き合うか、という課題もあった。「社会教育」は、社会と個との関係を重視しつつ教育を受ける権利保障に重きが置かれている。ただ文字面からすれば、主語は教育する側にあり、住民は自治体にとって教育を授ける対象となる。「生涯学習」は社会とつながる個という考えが希薄になりがちだが、個の多様性が重視される。主語を学習する側におき、自治体は住民をサポートする存在としている。

カレッジの「自分でテーマを選び歴史を主体的に学ぶ」という行為は、自らが置かれている社会や自分の経験してきたことと自分自身との関係を見つめ直すという行為と無関係ではあり得ないだろう。実質12年で幕を閉じた講座ではあるが、「社会」との関係を個々人が見つめ直しながら学ぶ「生涯学習」の実践例として受け取ってもらえればと思う。

（記・松崎）

第10期 緑陰（りょくいん）トーク

・会場：市民アーカイブ多摩（立川市幸町5―96―7　8頁地図）
当日☎042(536)5535
・時間：午後4時15分～6時
・定員：30人（要申込・先着順）
・参加費：300円

◇第1回　5月25日（土）
地域を本でつなぐ
―マルジナリア書店
小林えみさん（作家）

◇第2回　6月22日（土）
東北津波被災地を訪ねて
―集めたアーカイブ
吉田　明さん
（元高校教員）

◇第3回　7月27日（土）
戦争体験を今に伝える
―『川田文子さんのこと』を作って
山澤遥乃さん
山澤綾乃さん
高野慎太郎さん
（自由学園）

◇第4回　9月28日（土）
「御門訴事件（ごもんそじけん）」と出会って
―"歴史"と"思い"を伝える
草川幸子さん
（『御門訴事件を伝える活動の記録』編集者）

◆申込先：ネットワーク・市民アーカイブ事務局
☎042(396)2430
info@archive-tama.sakura.ne.jp

3館合同シンポジウム（2023年11月18日）参加報告

「市民活動資料」収集・整理・活用の現場から

法政大学大原社会問題研究所主催（環境アーカイブズと立教大学共生社会研究センター、ネットワーク・市民アーカイブ共催）による3館合同シンポジウムが初めて開催された。

市民活動資料を収集する3館それぞれが実践の中で大切に思っていることや気づきを語り合う企画で、参加してみて、「大切さ」は「課題」とともに生まれてくることを実感した。

法政大の加藤旭人さんと宇野淳子さんは、保管された資料を整理することと「つなぐ」ことをテーマに、日々閲覧カウンターに立つ者として「資料」というバトンをいかに準備し、渡すことができるのかを語った。

本企画の仕掛け人でもある立教大の平野泉さんは、ミニコミを「資料」＝研究素材として使われることの喜びと、そのときに微かに覚える違和について明かした。「だって読むことがただ楽しいミニコミは、キーワードが付けにくく、検索しにくいでしょう」という愛ある叫びでもあった。

そして、「「市民活動資料」収集・整理・活用の現場から」という企画に立ち会って改めて感じたのが、「資料」に関する1人ひとりに〈顔〉があるということだった。

当会運営委員の江頭晃子さんは、市民アーカイブ多摩の成り立ちを写真とともに語ったが、今では当たり前となった建物が少しずつ作られていく過程が収められた写真に、私は生前には会うことが叶わなかった人の姿を見つけた。もしかすると、それは私の勘違いかもしれない。しかし、確かなことは、当会のメンバーは、私が会えなかった人を知っている人たちであり、今日この会場でもその人たちと一緒にいるということの不思議だった。もっといえば、各館に所蔵されている「資料」の大半が、私が直接会うことはできなかった人たちの「記録」や「記憶」であり、その向こうには確かな顔が存在している。

もう1つ、その日印象に残ったのが、市民アーカイブを含めた「市民的動き」が、2000年代の大学・公共機関の知の危機から生まれたことだった。大切さが課題と共に生まれてくるように、危機から生まれる大切さもある。

3館の性格は違えども、これからも力を合わせていける仲間や友人が各「現場」にいる。その顔を、写真を撮りながら確認できたのも大きな成果であった。

（高原太一＝運営委員）

市民アーカイブ多摩の資料棚から⑰〈高齢者・その1〉

『ようこそ！市民アーカイブ多摩へ』の巻末に収録されている「ミニコミ目録」の「69高齢者」には45のミニコミが掲載されている。その中から、ある程度まとまった号数のあるものと特徴的なものを2回に分けて紹介しよう。なお号数の後の〈括弧内〉は発行年。

【交流・情報提供】

まずは、高齢者間や世代間の交流を促したり高齢者への情報提供を担うミニコミを紹介する。

『えんがわ・あい』はその名も「高齢による問題を、本人、家族、支えあう人たちと共に考え行動する会」が発行。通信には、高齢者施設見学、介護体験談、介護者家族の集い、くにたち散歩などの記事が載る。5号〈18〉以降を所蔵。

『あおぞら』を発行する「東村山いきいきシニア」は、住民主体の介護予防活動「元気塾」を市内で展開してきた団体。月刊『あおぞら』には、筋トレ・脳トレ・体操など市内各町にある「元気塾」の活動報告と予定が載る。67号〈08〉～248号〈23〉を所蔵。

『交流誌』（「福祉マンションをつくる会交流誌」から誌名変更）は「高齢期の住まい&暮らしをつなぐ会」が刊行する。毎号、理事長・井上亮子によるコラムが載る。テーマは老後の住まい、住み替え、相続、終活、フレイル（加齢による衰弱）対策、介護と見取り、遺言書等々。2014年に会の名称を「福祉マンションをつくる会」（01年設立）から「高齢期の住まい&暮らしをつなぐ会」に変更するが、名称案のアンケートにみられる多様な意見は会員の問題意識の広がりが反映されていて興味深い。17年12月終刊。欠号が多いが、「一面コラム集」（60～107号）を所蔵している。

『絆だより』を発行する「高齢社会を支える地域の絆づくりの会」は高齢者が生きやすく、市民同士が助け合える居場所作り情報を提供することを目指す。国立市各地で行われる市民交流会や研修・講演を取材し掲載。国立市議会への取材も積極的に行い、地域の声を市議会・行政に届けるとともに、市議会や諸委員会の活動を市民に知らせる役割も果たす。所蔵は4号〈16〉～92号〈23〉

『いきいき新聞』は、多摩市永山の多摩ニュータウン（70年代に入居開始）の一角に事業所を置く「福祉亭」が発行する月刊のミニコミ。地域包括支援センターからのお知らせと、いきいき事業として、囲碁、唱歌、手芸、スマホカフェなど福祉亭で行われる月間の予定や会員の詩・エッセイ・イラストが載る。「福祉亭」では500円のランチを提供するほか、月1回こども食堂を開催している。所蔵は210号〈21〉～233号〈23〉とそれ以前のもの若干。

『サラ通信』を刊行するのは「高齢社会の食と職を考えるチャンプルーの会」。地域の高齢者・障がい者に対して食事と生活についての情報・サービスの提供に関する事業を行い、福祉やまちづくりに寄与することを目的として2000年に設立された。レストランサラ（配食を含む）に続いて、ひろばサラ、デイサービスサラ、ケアプランサラへと活動範囲を広げていったが、19年、会の解散が決まった。所蔵は4号〈02〉～41号〈16〉。

『関・一つむぎ館での「雑談の会」会報』（関戸・一ノ宮コミュニティセンター運営協議会）はA3 1枚もので表面に多摩市内各地の歴史文化・行政・観光施設の写真（黒白）が載る。裏面には「多摩市の地誌」「考察と論点」などのコラムを掲載。なお、「雑談の会」は月1回聖蹟桜ヶ丘の「つむぎ館」にて開催。所蔵は23号〈07〉～114号〈14〉。

『くにたち豊かな老後をつくる会ミニ通信』は手書き4頁のミニコミである。医師、認知症患者の家族、市の高齢者支援や介護保険の担当者などの報告とその場での質疑が載る。とりわけ在宅介護や夜間介護などの現状と対処方法をわかりやすく提供している。所蔵は7号〈02〉～59号〈10〉。

『「在宅ケアを考える会」通信』は70～80歳代を中心とする国立市の市民グループが創刊。「要介護1だった夫がわずか1年で要介護5に」「なぜ家族は倒れるまで介護をしてしまうのか」といった身近な問題を取り上げる。本誌24号でも紹介している。所蔵は1号〈13〉～94号〈23〉で、合冊本も所蔵している。

『ひらや照らす通信』は「ひらやの里」が発行するミニコミ。「ひらやの里」は2015年に国立市が市民から遺贈された富士見台の土地・建物を高齢者を含む市民の居場所として活用している。通信は毎月1日の発行で、会員によるコラムとその月のイベントカレンダーを載せる。イベントは各種学習会の他、百歳体操・句会・トラさんを見る・フレイル測定・数独等、多方面にわたる。

【高齢者による自主・自律活動】

1962年、各地での老人クラブ結成の広がりを背景に、全国組織である全国老人クラブ連合会（全老連）が設立された。現在8万を超える単位クラブと

４００万以上の会員がいる。（地域によってはシニアクラブ、高齢クラブなどとも名乗る）近年は会員の減少が課題になっているようだが、本館の所蔵する全老連傘下の単位クラブの発行するミニコミから紹介しよう。

『年輪』は長生会、寿会、やよい会といった名称を持つ国立市内の老人クラブの連合会＝「国立市老人クラブ連合会」が発行する。会員による随筆、旅行記、川柳、体験記などを掲載する。なお、同連合会は54の支部を持つ公益社団法人・東京都老人クラブ連合会の一支部である。所蔵は67号〈03〉以降。その他に、全老連の単位クラブのミニコミとして『会報立川市老連』（立川市老人クラブ連合会・所蔵は67号〈03〉～108号〈23〉）、『久労連会報』（東久留米シニアクラブ連合会・所蔵は37号〈07〉～56号〈23〉）、『小平市高連だより』（小平市高齢クラブ連合会・所蔵は9号〈13〉～28号〈23〉）がある。

『ナルク』を発行する「日本・アクティブライフ・クラブ」は１９９４年に設立された全国ネットのＮＰＯ法人。会員の経験、特技、能力を活かした社会貢献活動及び高齢者の支援や介護・介助サービスなどの事業を行う。サービスを提供した活動時間を点数として預託（貯蓄）しておき、いずれ自分にサービスが必要となった時に預託した点数（貯蓄）を引き出し、サービスを受けるという独特の時間預託制度をもつ。所蔵は96号〈06〉から171号〈12〉。

『日本高齢期運動連絡会ニュース』を発行する「日本高齢期運動連絡会」は、高齢者の生活と権利を守り、高齢期保障確立と地位の向上をめざして１９９２年に設立された団体である。通信には同会を構成する各都道府県の「連絡会」の催す総会、シンポジウム、デモなどの報告が載る。所蔵は256号〈13〉～281号〈14〉。また、同時期の高齢期運動を取材した篠崎次男による『高齢期運動リポート』も所蔵している。

次回は、【介護福祉施設】【ボランティア・就業支援】【年金】関連のミニコミを紹介する。

（吉田明＝会員・資料整理ボランティア）

リレーエッセイ〈市民アーカイブ多摩のひと〉⑥

読み捨てていた資料の保存に驚きながら

立石昌紀
資料整理スタッフ

有料老人ホーム経営の会社を75歳半ばで退職。２人の娘が嫁いで久しい。孫も２人できていた。妻と２人暮らしの中、若い頃の趣味（登山やオーディオ）を懐かしみ、復活したい思いが強く湧いてきた。歳のせいか。

登山は、生まれ育った神戸の地を離れ、東京の大型スーパーに就職した時、大学の山岳部出身の同期入社の友人に誘われて始めた。北アルプスの穂高連峰や南アルプスの北岳、甲斐駒ケ岳の他、冬山では谷川岳、茶臼岳を経験した。今は体力も脚力もすっかり衰えて再開は無理なので、ＮＨＫの「にっぽん百名山」の他、山の紹介番組やガイドブックで楽しむことにした。

オーディオは、新たに機器を揃え直して楽しむことにした。１９７０年代に買い集めたレコード（クラシック・ジャズ・ロック他）を取り出して聴いている。最近、アナログレコードの音色が見直されているそうだ。

このような日々を送っていた私に、月１ゴルフ仲間の先輩が「暇なら一度見学に来ないか」と声を掛けくれたのがきっかけで、「市民アーカイブ多摩」の存在を知った。

今までも種々の市民活動資料を目にしてきていたが、その時々の情報を得た後は読み捨てていた。したがって、これだけの量の市民活動資料を収集・整理・保存・公開している活動は驚きであった。

知識なく、理解も浅い状態だったが、今では資料整理スタッフとして関わるようになった。先輩達の温かで丁寧な指導を受け、少しずつ活動内容の知識と作業への理解が進んだ。活動の意義と重要性も把握できてきた。

埋もれがちになる地域歴史の真実やカルチャーを探る上で、市民活動資料が貴重になると考え、活動の手伝いを楽しみの１つとしたい。

（たていし・まさき＝主に水曜開館日に資料整理担当）

市民アーカイブ多摩の四季⑯

春 アンズ（バラ科）

甘酸っぱさが人気で収穫時期は賑やか。高木になりすぎて、鳥たちにも好都合かな。

中国原産の薬用樹木で「杏」といい、その愛称あるいはその果実の意味が「杏子」です。現代の中国にアンという読みはありませんが、日本にアンズが渡来したといわれる奈良時代頃には大陸にアン・ヅという読みがあったのかもしれません。種子からとれる「杏仁」（漢方ではキョウニンと読む）は咳止めなどに使われる重要な薬材です。杏仁を粉末にして甘みを加え飲みやすくしたものが、中華のデザート「杏仁豆腐（あんにんどうふ）」の原型なのです。アンズの花といえば青空に映えるさわやかさでしょうか。花はウメやモモ、サクラに似ていますが花に柄がなく、開花時に萼片（がくへん）がそり返るのが特徴です。果実はウメと同じ時期にオレンジ色に熟し、果肉は実離れがよく、そのままでも食べられるし、ジャムを作ることもできます。

（邑田仁・むらたじん＝元東大小石川植物園園長）

アーカイブ多摩日誌

◇2024年度総会

6月16日（日）午前11～12時、子ども未来センター（西国立駅・立川駅南口徒歩）で総会を開催します（総会記念講演会と同日）。

◇会員継続・新規入会のお願い

会員の継続と新規ご入会をよろしくお願いします。ご一緒に市民活動資料の収集・保存活動を支えてください。開館当番や資料整理、運営委員会、企画部・広報部など関わってくださる方も募集中です。年度末カンパもぜひよろしくお願いいたします。

◇新・目録づくり始動

新しい目録づくりが始まりました。データベースと現物ファイルの確認、法政大学環境アーカイブズ所蔵ミニコミとの連動性などについても調査予定です。細かな作業ですが、一緒に取り組んでくださる方を募集中です。

◇法人化へのご意見募集中

会発足から17年目、長い検討時間を経て、いよいよNPO法人格取得に向け動き出します。会員の皆さまにはご意見を寄せていただきたく文書を同封しています。よろしくお願いします。

◇公立図書館にミニコミを

昨年実施した多摩地域公立図書館における地域ミニコミ所蔵調査で、1ファイルしかなかった某図書館に会員の方が働きかけ、あっという間に書架1連ミニコミ専用書架ができたそうです。

◇春の樹林開放日は3月17日

NPO法人グリーンサンクチュアリ悠が開催します。10～12時。歌とアコーディオンの演奏もあり。参加無料。

運営委員会など

10月21日　第7回運営委員会、参加者7人。会員・カンパ者、当番確認、来館者報告、各部会からの報告（以上毎回）。緑蔭トーク反省、3館合同シンポ、2月12日企画、新目録作成、『アーカイブ通信』29号、24年度緑蔭トーク講師案等検討。

11月18日　第8回運営委員会、参加者6人。3館合同シンポ感想。2月12日企画、NPO法人化に向けて、目録作成、『通信』30号内容案、総会日程・講師検討。

12月19日　第9回運営委員会、参加者8人。2月12日企画、NPO法人化、HP更新内容、緑蔭トーク講師決定・依頼状況、『通信』30号等検討。助成金情報、ボランティアからの提案等。

1月16日　第10回運営委員会、参加者8人。2月12日企画、緑蔭トーク依頼状況、総会記念講演会、23年度活動振り返り、24年度運営委員、GS悠への依頼文案検討他。

2月12日　「市民活動資料保存・活用次の10年を描く」開催。参加23人。

会員数（2024年1月）

177（正会員66人　賛助会員106人・5団体）

◆新規入会ありがとう

正会員　福島幸宏さん

カンパありがとう（2023年10月～24年1月）

加藤良夢さん、澤西義博さん

年賀状から（抜粋）

・地道な活動有難く思います。新年早々の災害に心痛めておりますが、一歩一歩着実に復興してゆくと信じています。今年も頑張りましょう。

・昨年は緑蔭トークに参加させていただき、良い時間でした。

・闘病生活を経て、歩けるようになりました。暗黒時代ですが、みなさん頑張ってください。

・猛暑の夏も厳しい冬も障がい者と共に楽しく遊ぶ。そういう場所であり続けられるように頑張ります。

・「政治とカネ」解決方法は理想選挙。自ら実践し、「権利の上に眠る」ことなく投票行動で示すことを市川房枝は87歳の生涯を通して示してくださいました。

・2023年中央図書館開館、多摩市図書館50周年を迎えました。これからも市民と図書館が協力し「真の市民の図書館」を創り続けていきましょう。

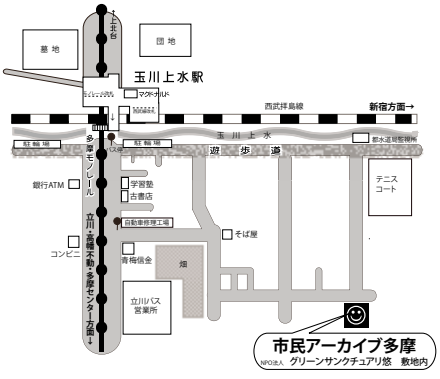
・次から次へと難題が出てきますが、一つひとつ解決してまいりましょう。

・今年は30歳以下会員を一人でも見つけられたらと思います。

編集後記

多くのミニコミに囲まれながら、無意識だけど、今の自分に必要な記事がさっと目の前に現れることがある。紙の神様の心遣いを感じる。（佐・増・鈴・江）

【市民アーカイブ多摩利用案内】



・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日（年末年始・8月中旬休館有）

・開館時間：午後1時～4時　　・入館カンパ：100円～

・所在地：〒190-0002 東京都立川市幸町5－96－7

（多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分）

・tel･fax：042－536－5535（電話は開館中のみ）

・見られる資料：市民団体や個人が発行するミニコミ（通信や会報等）

◆会員・カンパ募集中　～市民の活動を過去・現在・未来につないでください～

・正会員1口6,000円/年　・賛助会員1口3,000円/年　※団体会員2口～

ゆうちょ銀行　振替口座00120-9-729226　口座名：市民アーカイブ

※他銀行から　〇一九（ゼロイチキュウ）店（019）当座　0729226